

今、なぜタレントトランスファーなのか

山崎一彦

順天堂大学スポーツ健康科学部

2020年はソフト面のレガシーを重視する

日本陸上競技連盟は、2013年に2020年の東京オリンピック開催決定直後、「2020強化普及オリンピック特別対策プロジェクト」を編成した。そのプロジェクトの中で、1964年に開催された東京オリンピック前後を振り返ってみた。スポーツ全体の成果として、ソフト面ではシニア強化における実業団体制が定着し、普及においてはスポーツ少年団などの体制が拡充した。ハード面では高度経済成長にも助けられ、当時のオリンピック関連競技施設は後世にもつながるものであった。またオリンピック後は、各地域にも波及した競技施設は世界に誇れるほどである。しかしながら、陸上競技における実業団は各企業理念に基づいて設立しており、スポーツや陸上競技そのものの本質を見いだせないまま経済成長の減退とともに年々減少している。また、施設に関しても老朽化や施設管理運営など難しさなどに直面している。現在までのソフトとハードにおける共通点として、大きなフレームはできたが、スポーツ文化と伝統を築いている欧州、主にスポーツビジネスとして組織化している米国などの組織や仕組みなどの考え方などからは大きく遅れをとっている。そのため、仕組みづくりや理念の共有化などのソフト面の充実が喫緊の課題となっている。

2014年12月にプロジェクトチームは、国際競技力向上のため強化育成システムの5つの柱として、①強化組織の抜本的改変、②種目、競技トランスファー促進、③強化情報戦略の強化と拡充、④科学サポートの徹底的活用、⑤指導者養成の強化を挙げた。

この5つの柱により、東京オリンピックでの金メダル獲得や具体的メダル獲得数を増加させることも成功の一つとしたい。ただし、さらに重要であることは東京オリンピック後に私たちが陸上競技を通じて多くの人々が、陸上競技者の普及、発掘、育成、

強化の考えを理解することをレガシーとしていきたい願いが込められている。

これらを受け、2014年11月に「2020年東京オリンピックプロジェクト」を強化委員会の中に独立して組織化された。その中の試みとしてのワークグループの取り組みを紹介したい。

温故知新

過去を知る事とまとめる事。それは過去をもう一度走るだけのことだけでなく、新しい道进行することの助走となる。つまり、過去を修正して育成すればコンスタントなタレントを育成することができる。しかしながら、過去を改善しただけではオリンピックで金メダルを獲得できはしないだろう。これがタレントトランスファーマップを作成するということである。まずは日本代表選手がたどった道のりを客観的かつ明確に示し、地図を作成していく。陸上競技界に限らず多くの人々が陸上競技における大きなフレームを理解していくことを目的としている。

先天的資質を持った人材を確保することは非常に重要である。しかしながら私たちは、「タレントがない」と憂い嘆き、「あの競技者は勿体なかった。」などという指導者や関係者からの声が後を絶たない。裏を返せば、私たち自身の育成システムが十分でないことや、コーチング技量と体制の非を認めるということになる。もし、「タレントが少なく勿体ない」なら、せめて少ないタレントをいかに国際的競技者に育成していくかを考えることが先決だ。これらの育成方法がある程度明確にならないと、つまりタレント発掘もできないということになり、安易にタレント発掘と言えなくなってくる。

過去に世界で活躍してきた競技者は、必ず様々な競技や種目を変更（トランスファー）してステップアップをしながらパフォーマンス維持に成功してい

る。それでは、世界的アスリートや日本一流競技者はどのような道のりを辿ってパフォーマンスを極めていったのか。パフォーマンスの似通った競技者でも、それぞれ異なる道のりを歩んでいる場合がある。これらの全体像は、陸上関係者ならおぼろげながら理解しているが、明確にはなっていない。したがって、2020年東京オリンピックプロジェクトチームは、国内外の一流競技者が歩んできた共通の道や異なった道を地図にするタレントトランスファーマップの作成を試みることにした。

単なるタレント発掘に終わらないこと

一般社会通念として、陸上競技は先天的資質が大きく影響する代表的な競技であるとされている。しかしながら、他の競技団体が注目している幼少期におけるタレント発掘をし、英才教育を遂行することに関しては、多くの問題が起こるだろう。まず幼少期の競技会上位者を選抜し、多くの資金と時間を費やしても、それほど大きな効果を得ることが困難であると考えられる。なぜなら、高校から成人を向かえる年齢にならないと、おおよその種目で「タレント」と呼ばれるアスリートを決定づけることは難しいからだ。更には、タレント競技者のための強化育成システムは残念ながら確立していない。したがって、私たちは、タレントと思しき競技者のプールをしていくことが重要であると考えている。そのタレントたちが、どんなタイミングでどのように競技および種目トランスファーをしていけば良いのかを明らかにしていこうとしている。これらは次章から続く、海外の育成ケースや日本代表経験者による軌跡調査で実態が明確になることであろう。

すべての人が育成から強化までの全体像を理解すること

普及、育成、強化における各カテゴリーの指導者は、全体像を見ようとしても、結局はそのカテゴリーでのゴールを見出そうとしてしまう習性があることは否めない。今日の日本では、中高校生の競技者人口数が圧倒的な割合を占めている。全日本中学選手権、全国中学校駅伝、全国高校総体、全国高校駅伝などの過熱ぶりをみると、まさしく最高峰競技会と位置づけられている。当然、指導者、競技者の外部評価や動機付けは勝敗に集中してくる。特に育成段階の指導力という意味は、何人日本代表選手を輩出したかではなく、そのカテゴリーで総合優勝さ

せたが強調されてしまうという傾向にある。これではどんどん狭義な指導方法を確立していくこととなり、育成の指導力は先見性であることという指導理念は根付かない。指導者の入れ替わりがそれほど多くなく、選手の入替わりが激しいカテゴリーでは、せめて全ての指導者が様々な選手のスタートラインからゴールまでの全体像を知っておくことが重要である。

競技者にとっても、全体像を見ながら活動していくというのは困難な課題である。私の競技者時代を振り返ると世界選手権およびオリンピックの代表回数は7回と多い方であるが、種目に関する経験度と習熟度、人格的習熟度が増してこれからだという時に、身体の各部位が悲鳴を上げ始め、トレーニング量の継続ができず、質も維持ができなくなり重要競技会にピークを持っていくことが困難になってしまった。よく日本では、若年層で体作りをしっかりと行って、習熟度が増している成人期を越えればトレーニング量を減少させていくということ聞く。しかし、習熟度が増した時にトレーニング量と質が充実していたほうが大きな力を発揮することは間違いない。つまり日本では「経験（習熟度）」と「体力（トレーニングと技術）」の両輪で回そうとはせず、どちらかを強調したほうが美談になることが多いようである。

タレントトランスファーマップの発展性

コーチング現場では、なんとなく明らかなような部分を用いて指導することが多い。まずはタレントトランスファーマップを作成することにより、日本陸上競技界における中長期戦略の補助的役割になることが期待できる。

明確になることとして、下記の10項目が主に挙げられる。

- ① 日本人の高次パフォーマンス維持年齢とその期間が諸外国一流競技者との比較検討（競技者寿命）
- ② 早熟とは具体的にどんなことなのか
- ③ 日本人における基幹種目とトランスファー種目
- ④ 体力的と技術的変遷
- ⑤ 諸外国と日本の強化育成システムの比較
- ⑥ 人格的成熟度、体力および技術成熟度、トレーニング充実度の兼ね合い
- ⑦ 育成上の問題点
- ⑧ 育成および強化上の疑問点

- ⑨ 様々な競技者ケーススタディー
- ⑩ 種目特性

これらが、ある程度明らかになってくると、下記のことを期待できる。

- ① 育成時（特に小中高校）における競技会適正実施種目
- ② 一般的適正タレント
- ③ 指導者育成システムの改善
- ④ 指導者の質的向上（全体的な先見性の向上）

上記の項目が明らかになってくると、2020年東京オリンピックプロジェクトでスタートしている「ダイヤモンドアスリート」という挑戦的なタレント育成が一気に加速することができる。詳細はタレントマネージャーである石塚浩氏からの後述を参考にしてほしいが、ここでセレクトされた競技者の多くは、様々な種目にトランスファー出来る可能性を持っている。現段階のプランとしては、タレントトランスファーが「盾」であり、ダイヤモンドアスリートは「矛」である。双方を合わせると矛盾のようだが、この矛盾がマッチした時、日本陸上界の育成から強化までの一貫性のとれた仕組みが作れることを期待している。